

「ハバーマス／ルーマン論争の学史的意味とモダニティ

デュルケームと関わらせて 」

神戸大学 三上剛史

まず最初に、ハバーマス／ルーマン論争の学史的意味をドイツ社会学におけるポスト構造主義的離陸として捉え、「論争」とそれに続く両者の研究位相において、ハバーマスとルーマンが、「意味」と「主体」を巡るウェーバー的問題領域をどのように乗り越えようとしたかを示す。

続いて、両者のそれぞれの観点が理論的に成熟する中期以降の研究において、対立の焦点が次第に社会の規範論的構成を巡る問いへとシフトして行く点に注目する。これはデュルケームからパーソンズへと引き継がれた近代社会学のもう一つの基本的前提に関わる問いであり、「論争」においてもテーマ化されることのなかった新たな論点としてクローズアップされつつある。

ハバーマス／ルーマン論争と「論争」のその後、および現代社会学を取り巻く諸情勢の検討を通して明らかになるのは、このいわばデュルケーム的問題領域とでも呼ぶべき「道徳」と「連帯」に関する問題の再燃である。それは 20 世紀社会学の射程を検証する場でもあり、また今後の理論的發展にとって避けて通ることのできない論点である。